

善隣

No.490 通巻757

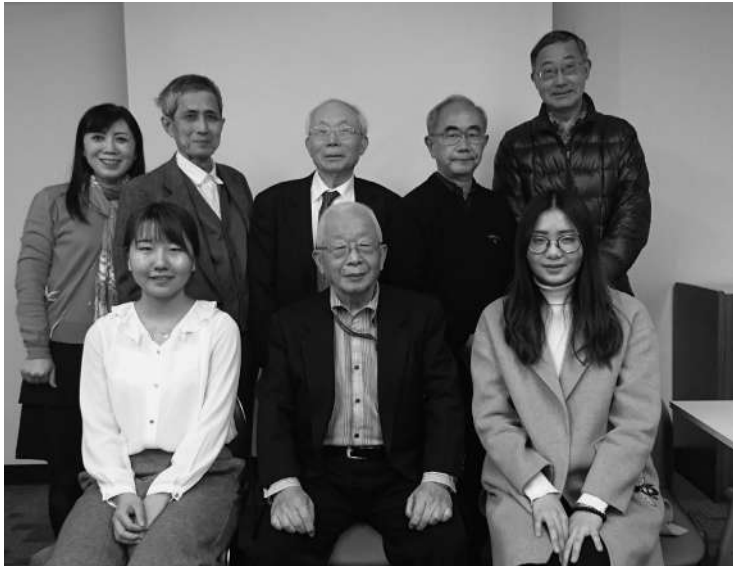
2018年（平成30年）4月1日発行（毎月1日発行）

2018

4

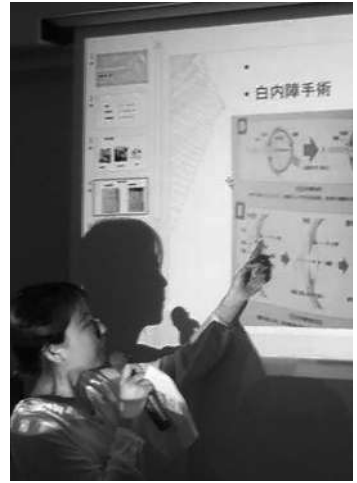


一般社団法人 国際善隣協会



▲中国医科大学生の報告会后、国際交流委員会委員と
（前列左：盛宇さん、右：蘇紫瑩さん、2018年3月1日）

順天堂大学病院眼科手術の
説明（パワーポイント）▼



謡曲会（陶謡会）の新年会。松木千俊先生（中央前）を囲んで（2018年2月20日）

善 隣 目 次 2018年 4 月号

公開講演会記録

ハルビンからの引揚げルートを自転車でたどる…………丸山 巖	2
ロシア極東経済の現状と政府の経済振興政策…………高橋 淳	12
キューバ再訪記	
社会主義最後の「改革・開放」はどこまで？…………田畑光永	18
不思議の国、イラン紀行…………中川啓造	26
中国ウォッチング…………編・訳 上松玲子	28
コラム〈腰折れ文〉八、…………渡邊澄子	30
陶々俳壇…………馬場由紀子選／大内善一	31
協会通信・会員だより・同好会だより…………	32
2018年4月の行事予定…………	33
みんなの写真館…………	32

善 隣 第490号 通巻757号

2018（平成30）年4月1日発行

発行所 〒105-0004 東京都港区新橋1-5-5

一般社団法人 国際善隣協会

TEL 03（3573）3051

FAX 03（3573）1783

発行人 矢野一彌

印刷所 （株）ゆにおんプレス

定価 一部400円 年額4,800円

振替 00120-0-145956

国際標準逐次刊行物 ISSN 0386-0345

©禁無断転載

公開講演会記録

ハルビンからの引揚げルートを 自転車でたどる

元JALパイロット 丸山 巖



生まれて少年期までを過ごした故郷ハ

ルビンから敗戦の混乱のなか、日本に引揚げてきたときにたどった葫蘆島までの全行程1000kmを自転車で走った。自転車をこぎながら当時に思いをはせ、戦争や引揚げ途中で亡くなった人々を慰霊する旅である。

実はこれより3年前に初めての自転車旅行を突如思いつき、2012年7月から47日間かけて、上海―西安―洛陽―徐州―上海を自転車で一巡りした。計画らしいものもなく行き当たりばったりの旅だったが、毎日楽しい「天天快樂」だった。中国の魅力が素晴らしくて忘れられず、もう一度中国を走ろう!と今回の旅になった。

旅のテーマ

今回の自転車旅行にCRI（中国国際放送局）が関心を示し、全旅程を同行取材することになった。同行取材陣はなんと25人の大部隊で、この一団がハルビンから葫蘆島までの2週間を付き合うことになった。こうなると番組企画としては、引揚げルートをただ自転車で走るというだけではすまず、いろいろな意味を盛り込んだ「旅のテーマ」が必要になる。放送局と打ち合わせた結果、次のようになった。

《旅のテーマ》

①戦後70年に際し、丸山が引揚げたときのハルビンから葫蘆島までのルートを

たどる

②中国の青年との交流

③戦争犠牲者の慰霊

少し補足すると、引揚げルートについては、1946年当時は国共内戦の真っ最中だったため、最前線は徒歩で超え、葫蘆島にたどり着くまで2か月を要した。今回は1000kmの道のりを自転車で2週間かけて走る計画である。また、中国青年との交流は吉林大学と北京の大学で行うことにした。さらに、戦争犠牲者の慰霊については、中国人か日本人かを問わず、すべての犠牲者に対して慰霊することにした。

そして旅のテーマには書いてないけれど、敗戦後の混乱したなかで引揚げまでの1年間、丸山家に救いの手を差し伸べ

てくれた命の恩人を探してお礼を言いたい、すでに亡くなっているなら子孫に会って感謝を伝えたい、という大きな目的も持っていた。

《参加者》

自転車旅行の参加者は3人で、引揚者である丸山巖本人(80歳)と伊藤裕隆さん(63歳)、小川健二さん(65歳)。伊藤裕隆さんは元福島県立小高工業高校校長をつとめた人で、東日本大震災のボランティア活動に行ったとき知り合った。彼とは、3年前に自転車で中国を2000kmも走り回り、「天天快樂」をともにした間柄なので気心は知れている。小川健二さんは元ホテルオークラの料理人で、テヘランで知り合った古い友達である。今はインドのガザ出身の奥さんとシドニーに住み、オーストラリア国籍を取得している氷彫刻芸術家という変わり種。いずれもこの自転車旅行に自ら進んでエントリーしてきた。

ハルビンへ

2015年7月12日、伊藤さんと新潟空港から中国南方航空616便に乗り込みハルビンへ向かった。シドニーからくる小川健二さんとはハルビンで合流する

ことになっている。ハルビンへの空路はあいにくの曇天で、巡航中も雲の上を飛んだものの、その上空も一面の黒雲で昼間なのに機内も薄暗い。日本海も沿海州もまったく見えない空の旅だったが、なぜか目的地付近だけがぽっかりと大きな穴が空いたようにピーカンだった。哈爾濱(ハルビン)太平洋国際空港に着陸した。滑走路はかなり長く、3000m級とお見受けした。後でパイロット仲間に確認したら3300mで、羽田の3000mよりも長かった。(日本最長は成田と関空の4000m)。土地が有り余っているだけに国際級だが、空港の周りは一望千里の畑で、駐機している飛行機もチラホラ。乗降用のブリッジがないので、バスで入国ゲートへ移動する。いわゆる「沖留め」である。ターミナルビルの造りもなにやら田舎臭い。しかしすべての掲示が中国語と英語で表示され、そこへRが逆向きになったようなキリル文字のロシア語が添えてある。19世紀末にロシア人が「東洋のパリ」を目指して創作した国際都市ハルビンだけのことはあり、ふだんはロシアからの訪問客が多いことをうかがわせる。現在のハルビンは人口1000万を超える東北地方最大の都市で、高層アパートが立ち並ぶ。道路は広いが市内に入る

と車と人があふれ、とつぜん渋滞が始まった。ホテルは果戈里(ゴッリ)大街に面した果戈里賓館で、宿泊手続きを終えるとすぐに恩人探しにとりかかった。

恩人探し

恩人探しのためハルビン在住で知人の洪瑤楹(ゴウヨウ)さんを訪問する。10年ぶりの再会である。東京生れの洪さんは87歳となられたいまもダンディで、日本統治の台湾で過ごされたから日本語がめっぽう堪能である。前回も、頼山陽の恋歌を引き合いに「君王上(きみわうじやう)に点なくんば……」などと講義をされて、理解できずに目を白黒させてしまった。その洪さんに消息調査を依頼した命の恩人の名前は林志楊さん。林さんは旧満州国濱江省の役人で、秘書課では父の同僚だった。

45年8月15日の日本敗戦のとき、母と私(10歳)と妹(7歳)の3人で、ハルビンに置き去り同然の状態になった。父は応召して呉の軍港へ、長男は大学生として奉天(瀋陽)に、二男は予科練を志願して鹿児島へと、6大家族が4か所にバラバラになり、それが敗戦とともに音信不通になってしまったのである。私たち3人はなんとか生き延びなければなら

ない。そのとき手を差し伸べてくれたのが林志楊さんだった。冬を控えたある日、大量の救援物資を持って同僚とわが家にやってきてくれたのである。戦後の混乱期だから、物は極端に不足していて、戦勝国の中国人やロシア人でも生活は楽じゃない。そんななかの救いの手だった。食糧も有難かったが、持ってきてくれた石炭がなければ厳寒のハルビンの冬は越せなかった。それを思えば、林さんはまさに命の恩人である。

しかし、事前に消息調べをお願いし、洪さんも八方手を尽くしてくださったが、林さんには子どももなく、縁者の消息もまったく不明とのことだった。どこに埋葬されているかもわからず、お墓参りもできなかった。

ハルビンでお世話になったもう一人に、私たちが住んでいた家の家主のロシア人エルマコフさんがいる。エルマコフさんはロシア革命から逃れてきた白系ロシア人で、父とは仲が良かった。強盗同然のソ連軍の兵士を何度も追い払ってくれたうえ、母を家政婦として雇ってくれた。また特別ルートで手に入れたヤミ物資の洗濯石鹸を売っておいで、と渡してくれた。もう売れるものは売りつくしていた時期だけに、この援護射撃は、まさに干天の

慈雨。小ぶりの煉瓦ほどもある固形の洗濯石鹸は飛ぶように売れて、日に100円もの売り上げがあった。純益は30円。この儲けだけで、3人家族の1日の食費が十分に賄えた。中国人の林志楊さんが「命の恩人」なら、エルマコフさんは「福の神」であった。エルマコフさんの消息について、近所に住んでいた人を探し当てて聞いてみたが、消息は不明という。70年の月日はあまりにも長く、何もかも押し流してしまっただろう。もう、これ以上の恩人探しや詮索は止めて、なにか別の形での恩返しを考えることにする。

ハルビンから200kmほど東の方正県という衛星都市に、敗戦の混乱のなか亡くなった満蒙開拓団員のために、中国人の住民が慰霊碑を建ててくれたという。残留孤児だった人たちが日本からやってきて慰霊祭をすると聞いたが、日程のやり繰りがどうにもつかない。敗戦に際して、自国民を外地に「棄民」しようとした国家に対する憤りがあるだけに、慰霊祭に参加できないのは残念である。考えた末に、中国国際放送局のスタッフをお願いし、花束を届けてもらうことにした。ところで、私は投宿しているホテルから数ブロック先で生まれ、11歳まで育った。念のため、日本を出発する前にとって

おいた戸籍謄本には、

【出生日】 昭和10年2月3日

【出生地】 満州国濱江省ハルピン市
(戸籍謄本はハルピンと記載)

と記されている。現在の黒龍江省哈爾濱市は、当時は濱江省ハルピン市と呼ばれていて、私がこの地の生まれであることは間違いなかった。

取材をかねて、ハルビン随一の繁華街であるキタイスカヤ(現・中央大街)に足を運んでみた。キタイスカヤとは、ロシア語で「中国人街」と言う意味である。なのに、まるでパリの一角を切り取って貼り付けたかのようにエキゾチック。石畳の道にアール・デコなど西欧風の建物が軒を連ね、昔とすこしも変わっていない。モデルン・ホテルの玄関から、エルマコフさんがひょっこり現れても、ちっとも不思議じゃない雰囲気がある。そんな懐かしい情景に接すると、あの敗戦当時のことが鮮明に思い出される。日本が負けたと聞いた途端、大人たちは手製の「ソ連国旗」を軒先に掲げ始めた。そう、赤地に黄色い鎌とハンマーが描かれたあの旗であるが、そんな小細工でソ連兵が手加減してくれるはずもなからう。大和魂とやらは何処へ置き忘れて来たのであろうか? あまりの腰抜けぶりに腹

が立ち、母にも頼んでわが家だけは旗を掲げなかった。

それにしても、敗戦から5日後の8月20日、ハルビンに進駐してきたソ連軍の装備は凄かった。ほとんどの兵士がシュパーギン41やスタエフ43短機関銃で武装している。明治時代の遺物38式歩兵銃が主体の「無敵の関東軍」とは大違いである。しかも徒歩ではなく、アメリカ製のジープやトラックを連ねてやって来たのだ。これでは日本が戦争に負けたのも無理はない。「兵は兇器」の言葉どおりで、生半可な軍備は国を誤るだけだ、と子ども心にも肝に銘じたものである。もちろんソ連軍の蛮行は許せないが、かつての日本軍も1918年（大正7年）の「シベリヤ出兵」あたりから、世界の鼻つまみ者になってしまったので、他人のことをとやかくは言えた義理じゃない。

厳しい冬が過ぎるとソ連軍は撤退し、春の訪れとともに八路军がやって来た。後の人民解放軍である。装備は関東軍から捕獲した中古のオンボロだったが、強盗同然のソ連軍と違って軍規は厳正そのものだった。兵士たちが歌っていた『三大紀律 八項注意』の軍歌そのままに、乱暴、狼藉、略奪などとは無縁の軍隊であった。

当然ながら八路军は民衆から熱狂的に支持されて、街の治安は一気に回復した。この評価は、中国各地から引揚げてきた邦人からもよく聞くことで、国共内戦の帰趨（ききう）とのちの人民共和国建国を予測させるに十分なものがあつた。

出発

インターネット通販で注文しておいた自転車を、市内の店で受け取り、付近を試乗してみる。上海にある「永久」Forever社製のドロップハンドルのスポーツタイプである。ホテルの裏通りの朝市で、安物のキャンバス・シューズと目覚まし時計を調達して準備完了。余談だが、朝市に「血圧計ります・料金1元」という看板を掲げた屋台があつたのにはビック



7月16日：出発前のホテル

クリ仰天。そばには、もっともらしく聴診器を首にかけた白衣のおっさんとサクウらしき青年も一人いた。13億人もお国だから何でもありだろうけど、果たして商売になるのだろうか？

7月16日、いよいよ出発。G102を南下する。道路にGが付くのは「国道」、



真っ直ぐに伸びるG102号線

Sは「省道」、Xは「県道」である。ほぼ直線だが大地はうねり、下り坂と上り坂の繰り返しになるので結構しんどい。北海道の石狩平野に似た風景が続くが、国道の幅は広くない。3年前に走った河南の道はもっと良かった。経済的に裕福な上海から南京にかけての400kmは特にすばらしく、立派な緑の分離帯3本を備えた16車線の大街道もあった。市街地には、車道との分離帯が設けられた自転車用道路が併設され、自転車用だけで2車線分の幅があつた。自転車道にはバイ

クなどの二輪車や小型の三輪車も走っていたが、ときには耕耘機も走っているのがいかにも中国的だ。

ハルビン郊外で731部隊の旧跡を訪ねてみたが、改修中では入れなかった。731部隊の薄気味悪い評判は当時から伝わっていて、少年の私もその存在は知っていた。

午後遅くになって前輪のパンクに見舞われた。修理を試みるが、チューブがタイヤより大きく、手持ちの修理道具ではどうしても直せない。通販では半値のふれ込みだったが、どうやらジャンク品を寄せ集めて組み立てた代物らしい。そういえば、走り始めの10km付近でハンドルのグリップがズルズルと滑り始め、よく見るとゴムでもプラスチックでもなく、黒いテープを重ねて巻き付けただけだっ



初日の快走

た。初日からこれでは先が思いやられる。自分では進めなくなったので、ヒッチハイクを試みる。通る車を必死で呼び止めているとワゴン車が止まってくれて、運転していた恰幅のいいおばさんが気前よく自転車と私を載せて12km先のホテルまで送ってくれた。元気印のおばさんは、マニュアル車でビュンビュンと飛ばす。それを追いかけける撮影隊は大変だったが、立ち往生した身には大助かりで大感謝だった。それに引き替え、小川さんと伊藤さんは、夕やみ迫るなか必死にチャリをこいで、15分遅れの到着だったが……。

2日目の双城市で、ジャンク・タイヤをプロの自転車屋に持ち込んで修理完了。これで明日からの快走が可能となった。3日目の出発前に、紅包をかざして「長春に着いたら、皆でビールを1000



7月18日：紅包でスタッフを激励

本飲もう」と撮影隊を激励。紅包は中国式の祝儀袋で、文字通り真っ赤な袋に金文字で「吉祥如意」とか「招福」などと書いてある。中身は日本でもらった祝儀である。紅包が取材スタッフとの距離をさらに縮めてくれたようだ。

撮影隊とひたすら長春市に向けて走る。郊外の国道は交通量も少なく、平地では延々と直線が続く。人家もポツリポツリとあるだけで、ちょっととした起伏がある、先が見えないほどに茫漠たる広野が続く。信号機は都市周辺にしかないが、中国の信号機は「紅」と

「緑」の2色が主体で、「黄色」があるのは珍しい。だから中国の信号機は「紅緑灯」と呼ばれているのであろう。運転手のマナーは日本で喧伝されているほどには悪くない。分離帯のない田舎の道でも、トラックは自転車に決して近寄らない。



カメラマンの活躍

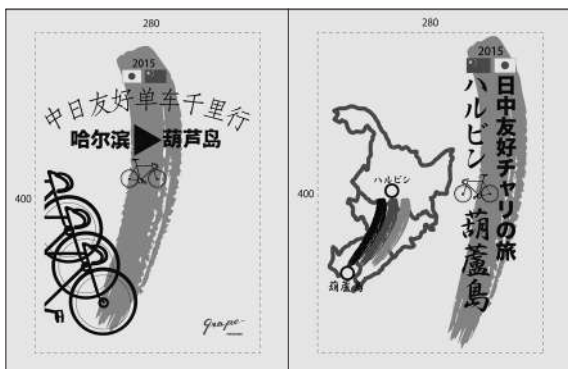
我々がフラフラ走っていると、遠くから警笛を鳴らしてしっぺ返しが来る。追いついてゆく。

黒龍江省から吉林省へ入り、飯屋で昼食をとる。注文以外にもたぐさんの食べ物が出てきた。珍しい外国人だから歓待するということらしく、店主のおばさんがお代は一文もいらぬというが、そうもいかないので無理やりお金を渡す。

長春

パンクしたときお世話になった元氣印のおばさんに、

当地から宅配便でお礼のTシャツを贈っていただいた。子どもさんへのプレゼントです、とメモを添えておいたら、数日後に受け取りとご挨拶の電話がスタッフ宛に入った。律儀な方である。



記念のTシャツ：フロント（右）、背中（左）

7月20日、吉林大学で学生たち10数名と交流。この大学は、学生数4万人の超有名校だそうである。日本でもらった饞別でみんなとレストランに行き、さらに交流を深めたが、男女とも秀才型ばかりでイマイチ歯ごたえがなかった。

旧満州国の首都（新京）だった長春では、かつての皇帝・溥儀の宮殿を訪れたが、付近に残っていた関東軍の本部に比べて粗末かつ貧弱で驚かされた。博物館になった宮殿には、満州時代の巨大なビル群が立ち並ぶ写真が展示してあったが、これらの建物はすべて日本の大手ゼネコンが建てたものである。"リニア談合"でも名前が挙がっている多くの会社が満州に進出して、しっぺ返しがしていたことが今さらながら分かる。

公主嶺

吉林省公主嶺では、11歳で引揚げたときの経験をまざまざと思い出した。長春から南に下った公主嶺は、関東軍20万人が駐留したほどの軍事的要衝で、引揚げ時は国共内戦の最前線になっていた。鉄橋が爆破されて鉄道は使えず、日本人を帰国させるために休戦した緩衝地帯を、北か

ら南へ深夜に徒歩で通過した。母に手を引かれ、私が妹の手を引いての数珠つなぎで、寝ながら歩いたことを覚えている。今回現場に立って爆破された鉄橋跡を見た。我々が夜間に渡ったのは木の仮橋だったこともわかった。

開原の月桂冠

7月24日、自転車で行っている少年が月桂冠のようなものを被っている。開原という街の近くであった。スタッフによると、この地方の子どもが遊びで作る冠だといふ。呼び止めてよく見ると、葉っぱ



7月24日：月桂冠の少年と

ばの付いた柳の小枝を編んだ冠で、後ろには1桁以上も尻尾のように長い枝が伸びている。手真似でおれのバンダナと交換しようと持ちかけたら、冠はすぐにくれたが、バンダナは要らないと言う。ハゲが伝染するのを嫌がったのかもしれない。中学生くらいであろうか、日本に連れて帰りたいほど素直で愛嬌たっぷり少年だった。

鉄嶺県平頂堡村

7月25日、遼寧省に入り、散髪に行った。床屋のおばさん3人が総出の歓迎で、聞いてみれば「初めて見る日本人」だという。正規の料金は10元だが5元でいい



7月25日：田舎の散髪屋

ビールの大びんが2元〜3元。ミネラルウォーターやスポーツドリンクが意外と高く、容量は少ないのに値段はビール並み。ホテルは120元〜600元ほどで、最低でもシャワーとエアコンは完備

という。さきの飯屋のおばさんといい、中国の田舎のおばさんは過分なおもてなしが無上の喜びらしい。ここも甘えるわけにいかないのも、おもてなしへの感謝のつもりで、入れ代わり立ち代わりの記念写真にも応じて、倍の20元を置いてきた。

それにしても中国の生活必需品は安い。人口は日本の10倍強、GDPは世界第2位で日本より少し上。それを1人当たり

に均すと約10分の1だから、単純に考えれば、人々の収入だって日本の10分の1で勘定が合う。物価だって日本の10分の1でなければ、人民が黙っちゃいけないかもしれない。

ビールの大びんが2元〜3元。ミネラル

していた。食事は、昼なら1人10元、豪華な夕食でも100元程度、味はさまだがひどい外れはなかった。どこに行っても物は豊富で、都市と地方の格差はあまり感じなかった。

3年前の為替レートは「1元＝12円」だったので割安感もあったが、今回は「1元＝18円」になっていた。物価は上がっていなかったけど、出費がかさむのは為替レートのせいだから、これはやむを得ない。

さて、道中は真夏なのでとても暑い。最高気温は40℃にもなったが、それでも数値ほどには暑さを感じない。もともと夏に強いこともあるが、空気が乾燥しているのも、日陰に入るとすぐに汗が引く。しかも、自転車走っていると、風を切るのが扇風機にあたっているようで、爽快この上ない。よく整備された街道の並木道も日陰をつくってくれるのでありがたい。停まると暑いのが、日陰に入るとタオルを使うまでもなく汗はすぐ引く。ともあれ水分補給は欠かせない。中国では白湯をよく飲む。一流のレストランでも、黙って座れば白湯が出てくる。お茶は有料である。走るときもいろんな飲み物を試してみたが、渴きを止めるのには白湯が一番だった。さすがに中国四千年

の歴史が生み出した処方だと納得した。

瀋陽

7月26日、満州事変の発端となった柳条湖鉄道爆破事件の現場を訪れた。1931年9月18日（昭和6年）に日本の所有する南満州鉄道（満鉄）の線路が爆破されたもので、関東軍はこれを中国軍による犯行と発表することで、満州における軍事展開およびその占領の口実として



7月26日：「9.18」歴史博物館

利用した。実際は関東軍が謀略のために爆破したもので、爆破の規模は実に小さく、ウィキペディアによると片側のレールが約80cm破損し、枕木の破損も2か所にとどまった。これでは爆破工作としては失敗だろう。爆破現場に立つと、犯行を行ったとされる張子良ら東北軍の兵舎・北大営までは約700mしかない。中国軍の仕業ならこんな近い距離で奇襲に失敗するはずがない。

「9・18」歴史博物館」も訪れたが、展示は日本の残虐行為と昨今の右傾化に関するものばかりだった。館長さんには、見学した人たちが未来に希望を持てるよう、日中友好に努力する日本人もいることを紹介し、展示にも加えてほしいとお願いしておいた。

葫蘆島に到着

葫蘆島を目前にして、発熱をこらえながら自転車をこいできた小川健二さんとうとうダウンした。伊藤裕隆さんも走るのがやめてしまった。3人一緒に完走しなかったが、とても残念。そんなわけで7月29日、最後は車に乗って終着点の葫蘆島にたどり着いた。7月16日ハルビンでペダルをこぎ始めてちょうど2週間、



小川さんにお灸をすえる

1000kmの旅だった。

いまや人口300万人の海浜都市・葫蘆島も、かつては小さな漁村だった。中国各地からの引揚げ者が日本へ向かう船に乗った拠点の港で、105万人が通過したといわれている。さぞかし中国の人たちは、物不足と物価の高騰などで難儀されたことであろう。引揚げたちは、船に乗れるまでバラックやテントで過ごしていた。集結から数日後、米軍貸与のLS T（戦車揚陸艇）に乗せられて日本に向かったが、日本人の船員さんの顔を見て、やっと故国に帰れるという実感がわいたのを覚えている。

7月31日、葫蘆島市の龍湾公園にある、日本の婦人が寄贈した石碑に参拝し献花と焼香。引揚げの途中この地で大病に倒



葫蘆島の丘から引揚げ港を望む

れた彼女を、中国人が助けってくれたことへのお礼の石碑だという。人の背丈ほどもある自然石に「恩」の字が大きく刻まれているが、薄汚れていて読み難い。小川さんと2人で石碑を磨き、恩の字に朱色のペンキを入れた。

午後は港を見おろす丘の上に建つ「1050000日本僑俘遣返之地」と大書してある記念碑に参拝。105万人の日本人がここを通過して引揚げたことが碑に数字でしっかりと刻まれている。ここでも献花と焼香をして、中国式に「金元宝^{ゴングバウ}」を焚いた。金元宝は金色の紙で作った供え物で、冥銭^{めいせん}の一種。「三途の川

渡し賃^{ワタシゲ}」のようなものである。取材に来ていた地元の記者に「日本でも金元宝を焚く習慣があるのか?」と聞かれたが、もちろん日本にはない。「中国流の弔い方を加えたことで、感謝と謝罪の気持ちを含めたつもりです」と答えておいたので、中国の人たちにも、こちらの意思は十分伝わったと思う。

お世話になった林さんやエルマコフさんへの感謝を込めて、また引揚げの途中で亡くなった人たちのご冥福を祈り、迷惑をかけた中国の人たちへのお詫びの気持ちも込めての献花と焼香だった。慰霊の旅はこれで終了である。

肩の荷を下ろした感もあるが、運命の糸に操られたかのような自分の人生を思わずにはいられない。父は新兵を引き連れ、飛行機の燃料になる松根油^{しょうこんあぶら}を求めて山奥に入っていたので、呉軍港の大空襲にも広島島の原爆にも遭わなかった。奉天で敗戦を迎えた長兄は、バザールでのトラブルに巻き込まれ、危うく殺されそうになったところをソ連軍の将校に助けられたという。予科練に志願した次兄は、飛行機も燃料もなくなり、もっぱら土方^{どかた}専門の「ドカ練」だったので戦闘とは無縁だった。母と私と妹の3人も、敗戦のとき大都会のハルビンに住んでいたのが、

なによりも幸運であった。中国の諺にも「大乱居城／小乱居郷」とある(城は都会、郷は田舎の意味)。しかも、あの公主嶺での深夜の強行軍で、誰かがちょっとでも手を放していたら、すぐに落伍して行方不明になっていたのだ。それを思えば、4か所に分れていた6人の家族が五体満足で再会できたのは、奇跡としか言いようがない。46年10月、6人は原爆で焼け野原となった父母の故郷広島市に集結したが、帰着は私たち母子3人組が最後だった。

旅を終えて

北京に到着後、2台の自転車^{自転車}を寄贈した。小川健二さんはCRI(中国国際放送局)に贈呈したので、走行の記録とともにオフィスのロビーに飾ってある。私の自転車は、同行取材の若手カメラマン鄭毅さんへプレゼントした。名前の日本語読みが「たけし」なのは、次兄の「彪・たけし」と同音で、これも何かのご縁であろう。共通語はつたない英語だったが、「たけし!」と声をかけると「はい」と日本語で返事をする好青年である。ひと休みして、8月3日は北京米国英語語言学院で、夏期講習の日本語学習の



取材完了の記念撮影

学生200人との交流会に参加した。質問も多くて1時間の予定が2時間以上にもなり、最後は女子学生に取り囲まれてのサイン会のようになった。この学生たちは熱気にあふれ、日本への関心の高さに驚いた。

CRIが同行取材した80歳慰霊のチャリンコ旅は、1時間番組「回想の大地」70年の時を超えて」として放送された。

2015年ハルビン—葫蘆島の 引揚げルートをたどる旅程

7月12日

- 新潟空港から空路ハルビン到着
- 恩人探しするが、消息は不明

7月14日

- スポーツタイプの自転車購入

7月16日 黒龍江省ハルビン出発

- 731部隊の旧跡を訪ねる
- 前輪がパンクする

7月20日 吉林省長春に到着

- 吉林大学で学生たちと交流

7月23日 吉林省公主嶺に到着

- 深夜徒歩で突破した場所を見る

7月26日 遼寧省瀋陽に到着

- 柳条湖爆破事件の現場を見る

7月29日 遼寧省葫蘆島に到着

- 2週間の自転車旅行を終える

7月31日

- 「恩」の石碑を補修し参拝献花
- 「1050000日本僑俘遣返之地」の記念碑に参拝

8月3日

- 北京米国英語語言学院で学生200人と交流

CRIのホームページに今も掲載されているので、「回想の大地」で検索すると番組をインターネットで見ることが出来る。今回が2回目の中国自転車旅だったが、陽気で親切な人ばかりで不愉快な思いをしたことはほとんどなかった。出会った中国人は数えきれないほどいたが、中国語が喋れないのに、とくに不便を感じなかった。戦後70年にもなり、世代交代が進んでいるせいかもしれないが、日中15年戦争のかげりは、ほとんど感じられない。政治状況は別として、庶民の素晴らしい包容力を感じさせてくれた旅だった。葫蘆島の港が見える丘の上から、日本に向けて紙ヒコキを飛ばしてみた。しかし、何度やっても、風にあおられて舞

い戻ってきた。この大地が呼んでいるかもしれない。まだまだ、中国とのご縁は続きそうである。

(2017年11月22日・公開フォーラム)

筆者略歴(まるやま いわお)

元日本航空機長会会長(1982年～1992年)。

東日本大震災発生直後から現地ボランティア活動を開始、現在も支援を行っている。

1980年に故稲尾和久氏とともに「日本航空棒球団」を結成、廈門大学や福建師範大学などを訪問。それをきっかけに中国との草の根市民交流を続けている。

公開講演会記録

ロシア極東経済の現状と

政府の経済振興政策

日本貿易振興機構（ジェトロ）海外調査部欧州ロシアCIS課 高橋 淳



はじめに

今回ロシア極東経済をご説明する機会を頂戴しました。この場を借りまして関係者の皆様にお礼申し上げます。最近何かと話題に上ることの多いロシア極東ですが、今回はロシア極東経済の現状を政策的な側面も含めてご説明させていただきます。ければと思います。

2000年代は中央集権への政争と資源価格による浮沈を経験

ロシア極東経済を理解するにあたり、まずはロシア全体の経済状況と政府の経済政策について理解を深める必要があります。

まず、ロシアは世界で最も面積の広い国家です。日本の面積の45倍あります。広大な土地に日本の人口より少し多い1億4680万人が住んでいます。ウラル山脈より西側の地域は「欧州ロシア」と呼ばれます。欧州ロシアには人口の2/3である1億人が住んでいます。また、ロシアは100以上の民族が住む多民族国家でもあります。モスクワから東に800キロの場所に私がロシア語を学んだタタルスタン共和国のカザンという町がありますが、住民の半分はロシア正教、残り半分はイスラム教を信仰しています。周辺にはバシコルトスタン共和国、マリィエル共和国、ウドムルト共和国などの民族共和国や、仏教を信仰するカルムイクア共和国などもあります。現在に至るま

で、この広大で多様な価値観を持つ国家を纏めるためには強力な政治力が必要でした。それを体現したのがプーチン大統領と言えます。

ソ連崩壊後の1990年代、ロシア経済は混乱しました。地方構成体の知事たちはそれぞれの地元で派閥を形成し、経済的な利権を独占します。警察を含む公的機関の汚職は常習で、合併企業などではロシア側パートナーによる乗っ取りなどが起きたのもこの時期です。ロシア極東のサハリン州では日系企業が参画したホテルが乗っ取りにあった事案や、資源の権益を巡り政府と「オリガルヒ」と呼ばれる新興財閥が争った事案、日系商社が参画した資源開発プロジェクトに環境問題を口実に政府が介入した事案など、

経済分野でロシアへの印象の悪いイメージが定着したのもこの時期です。

2000年代の中ごろから後半になると、プーチン大統領は知事を事実上の任命制にするなど、中央集権を確立します。2005年ごろからは、原油価格などの資源価格が上昇し始め、2008年6月には1バレル130ドルを超えます。ルーブルは高騰し、年の経済成長は8・5%を記録するなど、ロシア経済は「絶頂期」を迎えました。ロシアが「BRICS」の一角として、ブラジル、インド、中国、南アフリカとともに注目されたのもこの時期です。しかし、2008年に起こったリーマンショックの影響で油価が暴落、ロシアの2009年の経済成長率はマイナス7・8%まで落ち込みました。2010年には経済成長率は4・5%となりプラス成長を取り戻し、BRICSのなかでもリーマンショックへの克服は速かったと言われています。しかし、回復後の2011年から2013年まで、油価が110ドル前後の高値で推移していたにも関わらず、2000年代後半のような経済成長に勢いがなくなり、前年の成長率を下回る年が続きました(図1)。すでに、エネルギー価格の伸びが経済成長に直結しない状況になっていたのです。

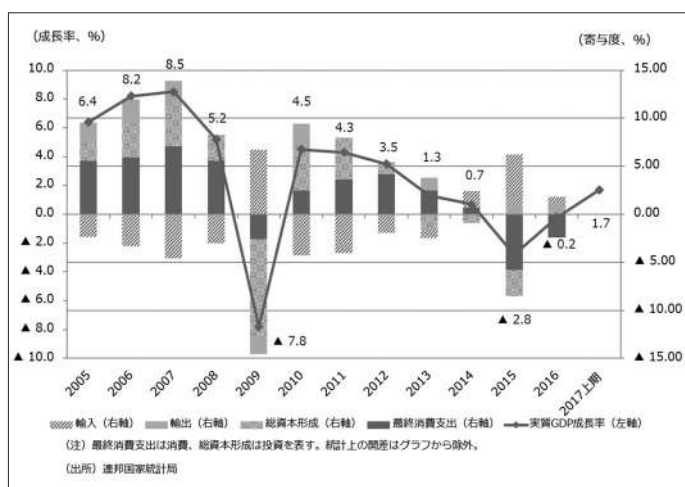


図1 ロシアの実質GDP成長率と寄与度の推移

欧米との関係変化で輸入代替政策を推進

この状況を打開すべく、プーチン大統領は外資の導入を積極的に図ります。資本と技術を導入し、産業の裾野を広げることと、エネルギー依存型経済から脱却すべく、投資環境の整備に乗り出します。2012年2月には、プーチン大統領は毎

年世界銀行が発行する「Doing Business」レポートの投資環境順位で、当時120位だったロシアの順位を、「2018年に20位まで引き上げる」と宣言します。

当時、広大な国土に多様な民族が住むロシアでは、汚職撲滅など文化的な側面にまで踏み込んだ改革は一筋縄ではないかと思われていました。しかし、プーチン大統領の強力なイニシアチブにより投資環境改善への掛け声は続き、Doing Businessの2017年版ではロシアの投資環境は35位までランクが上がりました。2018年に20位という目標を達成できるかはまだ分かりません。また、同ランキングは投資環境の実態を正確に反映しているとは言えません。しかし、ロシアの投資・ビジネス環境が2000年代に比べて格段に良くなった、というのは関係者の一致した意見と思われます。当時、投資や技術導入にあたっては、首都モスクワに近い欧州との関係が重要でした。毎年6月にサンクトペテルブルクで開催される「サンクトペテルブルク国際経済フォーラム」には、欧米から多くの政治家や企業経営者が集まりました。2014年2月にウクライナで政争が発生、続いて3月にはロシアによるクリミア併合が行われ、状況が一変します。

欧米・日本はロシアへの経済制裁を発動、ロシアと欧米との関係が急速に冷却化します。同年6月には原油価格が急速に落ち込み、ロシアの通貨ルーブルも対ドルで1/2以下に下落します。2014年の経済成長率は0・7%、2015年度はマイナス2・8%とロシア経済は激しい落ち込みを記録します。ロシアも欧米からの経済制裁に対抗し、欧州からの食品の禁輸措置を取ります。スーパーでは欧州産の加工食品が姿を消し、ロシア産の食品に置き換わりました。以後、ロシアの経済的関心は「輸出代替政策」へ、地理的な関心も西の欧州から東のアジアへ一層向かうことになります。

「輸入代替政策」とは、ロシアの産業分野で海外（輸入）依存度が高い産業・品目につき、ロシア国内で製造を進めることで依存度（輸入）を減らすことを目的とした政策です。2014年4月に発表された国家プログラム「工業発展と競争力向上」で具体的な政策として明記されました。2020年までを実施期間とし、国防産業、工作機械、重機械、電気機械、化学など21分野からなるサブプログラムの下で国産比率、輸出規模などを数値目標としています。2014年12月には、プーチン大統領が年次教書演説

（施政方針演説）のなかで輸入代替政策の推進を表明し、強力なイニシアチブにより政府の最優先政策として遂行されることになりました。続く2015年8月には、政府内にメドベージェフ首相を議長とした「輸入代替政府委員会」が設置され、現在でも定期的に輸入代替の状況をモニタリングしています。

ロシア政府が進める輸入代替の手法は主に3つあります。a. 投資・研究開発のための補助金、b. 公共調達での国産品優遇（国が資本参加している企業による調達含む）、c. 投資家への税制優遇です。日本企業との関係では、特にb. c. の点で影響が出ています。病院等の公的機関のみならず、ガスプロムやロスネフチといった政府系企業への入札について日本産製品が不利な状況におかれます。ロシア側のパートナーからは「ロシアへ製造を移管しないとロシアで将来的なビジネスの発展はない」と間接的に言われた日本企業もあります。c. について、ロシア国内の地場企業に積極的な投資を促し、海外からの投資の呼び水とすべく、ロシア政府は2つの優遇税制スキームを創設します。a. 優先的社会経済発展区域（TOR）、b. ウラジオストク自由港の2つです。詳細は極東の部分で

記載しますが、企業利潤税（法人税）ほか複数の税の軽減のほか、通関手続の簡素化などが認められています。

資源、輸送、テストマーケットとしてのロシア極東

上記状況を踏まえてロシア極東の話を進めていきましょう。ロシア極東の面積は617万㎡、全ロシアの36%を占める広大な地域です。ウラジオストクを抱える沿海地方、ロシア極東の行政の中心であるハバロフスクがあるハバロフスク地方、旧樺太のサハリン州、ヤクート人の民族共和国であるサハ共和国（ヤクーチヤ）など、9つの連邦構成体が存在します（図2）。一方で人口は619万人、全ロシアの人口の4・2%にしかすぎません。ロシア極東の中心都市であるハバロフスク、ウラジオストクでさえ62万人、63万人です。国境で接する中国・黒竜江省の省都ハルビン市が人口1000万人であることを考えても、ロシア極東の人口がいかに少ないかが分かります。このため、ロシア政府は長らくロシア極東の開発に関心を持ってきませんでした。モスクワ、サンクトペテルブルクなどの大都市圏と地方の格差が広がった結果、ロ

シア極東の住民は欧州ロシアへ移動し、現在でも人口は減少が続いています。日本との経済関係では、ウラジオストクを中心に日本からの中古車の輸入と、ハバロフスク地方を中心に原木の対日輸出が長年続きました。しかし、ロシア政府は産業の高度化のため、2007年に原木の輸出関税を大幅に引き上げます。また、2012年には中古自動車に対するリサイクル税の導入で、極東の主要産業であった中古車・木材ビジネスが急速に縮小し

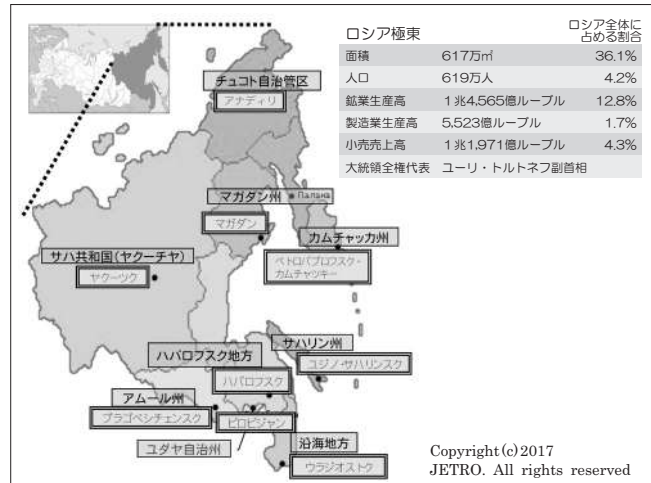


図2 ロシア極東の概要

ました。

経済的な視点でとらえると、ロシア極東は非常に小さい消費市場と言えます。1億人が住む欧州ロシア、国境で接する中国東北三省（1億人）、新興市場として最近最も日本企業が注目するベトナム（9270万人）、隣国の韓国（5125万人）と比べて一目瞭然です。ウラジオストクでは現在、日系自動車組立大手のマツダが現地資本の「ソレルス」とマツダブランドの乗用車を組み立てています。が、生産された自動車の8割以上が欧州ロシアへ輸送・販売されています。

ロシア極東は日本とのビジネスにとって大きく3つの視点で捉えることができます。a. 豊富な天然資源、b. 太平洋への出口、ロシアへの入口（物流、輸送）、c. テストマーケットとしての消費市場です。ロシア極東は天然資源の宝庫です。日系大手商社などが参画するプロジェクトの「サハリナー1」や「サハリナー2」で有名な天然ガス、原油の採掘、世界的な産地であるダイヤモンド、金、石炭、レアメタル、鉄鉱石などの鉱物資源のほか、原木などの森林資源、広大な土地で栽培される大豆や小麦、漁業資源などがあります。以前は内陸の産地から港に至る輸送手段が確保されておらず、開発が

一向に進まない状況でしたが、最近ロシア政府やロシア鉄道が資本を投下し、鉄道や道路などの整備を進め、産地の開発が進んでいます。資源輸出にあたって、加工工場や港湾設備を整備する必要があります。現在、ロシアの原油採掘大手のロスネフチはウラジオストク近郊に新たに大規模な原油加工コンビナートと輸出基地の建設を進めています。また、天然ガス採掘大手のガスプロムはサハリナー2プロジェクトの輸出力拡大のほか、アムール州スヴォボドヌイ市に世界でも有数の天然ガス加工・化学コンビナートの建設を開始しています。これら資源分野の大規模プロジェクトは大手商社やプラント分野の日本企業にとってビジネスチャンスとなりうるほか、ウラジオストクの港（ヴォストチヌイ港）の港湾設備の更新には日本の商社がかかわっています。

ウラジオストクはシベリア鉄道の東の出发点であり、欧州方面への玄関口でもあります。加えて、中国東北三省から中国南部へ輸送される貨物もウラジオストク経由でトランジット輸送され、その物量も急増しています。「プリモリエー1」「プリモリエー2」と名付けられた口中国際輸送回廊の整備のため、ロシア政府もウラジオストク近郊の港湾を積極的に

整備し始めています。

優遇制度の創設で海外からの投資も

ロシア極東では、資源分野を除いて日系企業による大規模な投資案件は実現していません。最大の理由は前述のとおり、人口の欧州部への偏重です。製造分野での日系企業の投資の多くは、a. 日本から海路で直接輸送できるサンクトペテルブルク周辺（自動車産業）、b. 大消費地であるモスクワ周辺、c. ソ連時代からの産業集積地帯であるヴォルガ川周辺の3地域に所在しています。ウラジオストクではマツダブランドの乗用車の組み立てが行われていますが、ウラジオストクから欧州方面への輸送に際してロシア政府より補助金が拠出されており、欧州部での価格競争力の一部が保たれている状況です。

日本からの中古車ビジネスという大きな産業が失われたウラジオストクをはじめ、極東の経済振興、地域発展を図るため、地元資本の積極的な投資促進と外国資本による投資受け入れを進める必要があります。このため、ロシア政府は大幅な税制優遇制度を創設しました。a. 優先的社会経済発展区域（TOR）、b.

ウラジオストク自由港の2つです。投資規模と業種によって優遇の内容は変わりますが、企業利潤税（法人税）の当初5年間の無税を含む合計10年間の減税、資産税の免除、雇用者側が負担する被雇用者の社会保険費用の大幅な軽減を含む税制、外国人の雇用条件や外国人による労働行為の緩和などの移民規制の緩和、通関手続きの簡素化や関税の免除など、幅広い優遇が認められました。また、ウラジオストク自由港の特徴の一つは、電子査証申請（E-visa）制度です。2017年8月からスタートした制度で、インターネット経由でロシア査証を申請することができます。許可が下りればウラジオストクの空港（海路の場合は港）で査証発給がなされます。いままでは日本の住所を管轄するロシア大使館領事部もしくは各地のロシア領事館に旅券を1週間から2週間近く預ける必要があり、また、商用ビザではロシア側から招待状を入手しなければならぬなど、アジアなどにも頻繁に出張する日本企業関係者には不便な状況でした。しかし、E-visa制度の導入で、観光・商用・文化交流でネット経由での申請が認められるようになります。2017年12月現在、対象範囲がウラジオストク（沿海地方）に限定されて

いますが、2018年からはサハリン州やカムチャッカ州にも拡大が予定されており、最終的には、ロシア極東の国際空港がE-visaの対象となる予定です。日本人や日本企業にとってロシア極東がより近い存在になっていることは間違いないありません。

このような優遇制度も追い風となり、すこしずつではありますが、日本企業がロシア極東へ投資を開始しています。プラント大手の日揮（JGC）はハバロフスクで野菜の温室栽培を開始しました。北海道帯広市の北斗病院はウラジオストクで画像診断センターやリハビリセンターを開設。不動産大手の飯田グループホールディングスはウラジオストクでマンション建設・分譲や戸建住宅の販売を開始しました。北海道銀行が出資する北海道総合商事は、サハ共和国（ヤクーチヤ）で同じく温室栽培やウラジオストクでの居酒屋出店を支援しています。平塚市の自動車・水産関連商社、荒井商事は現地パートナーと一緒に合弁企業を設立、ウラジオストクで自動車の解体・リサイクル・部品販売事業を開始しました。将来的には極東以外の地域にも展開予定です。野菜の温室栽培についても、「日本品質」の野菜として現地で高い評価を得ており、

作付面積の拡大やシベリア地方への展開などが検討されています。前述のとおり、市場規模から判断すると日系企業にとって最終的な目標はモスクワなどの欧州ロシアとなりますが、日本との物理的・心理的距離も近いロシア極東でビジネスを立ち上げ西へ向かう手法は、特に優遇税制が充実している現状では「理にかなった選択」と言えるでしょう。

政府間の関係は追い風、8項目を中心に協力実施

ロシア政府はロシア極東でのこれ以上の人口減少を食い止めるため、a. ロシア極東の生活環境を向上させる、b. 欧州ロシアからロシア極東への人口の移動を推奨する、2つの政策をとりはじめました。生活環境の向上については、道路や空港などの交通インフラの整備、モスクワ方面への航空券に対する補助金支出、サンクトペテルブルクの名門劇場であるマリインスキー劇場の沿海地方劇場とエリミターージュ美術館分館の建設などがあります。また、「極東の1ヘクタール」という制度を創設し、欧州ロシアから極東ロシアへの移住希望者に対して政府が1ヘクタールを無償で提供するプログラ

ムを開始しました。これらプログラムの有用性と、ロシア極東の人口が増加に転じるかどうかは今後の展開を見る必要があります。

現在、ロシア極東の経済開発に関連して、日本とロシアの政府間では追い風が吹いていると言えます。昨年のプーチン大統領の日本訪問に続き、2017年9月にウラジオストクで開催された「東方経済フォーラム」に安倍総理が出席しました。日本側は2016年にロシア側に対し「8項目の協力プラン」を提示し、現在a. 健康寿命の伸長、b. 快適・清潔で住みやすく活動しやすい都市作り、c. 中小企業交流・協力の抜本的拡大、d. エネルギー、e. ロシアの産業多様化・生産性向上、f. 極東の産業振興・輸出基地化、g. 先端技術協力、h. 人的交流の抜本的拡大の分野で協力を進めています。政府の意向を汲み国有企業が大規模投資を進めるロシアと、最終的には民間企業の採算性の問題となる日本との間で相互の思惑が一致しない場面もあります。過去と比較してロシア極東の投資環境は各段に良くなったことは間違いないと思います。

昨年からロシア人への日本査証の発給手続が簡素化され、多くのロシア人が日

本へ観光に来るようになりました。サハリン州ユジノサハリンスクと函館を結ぶ航空便は増便となり、人の交流も盛んになっていきます。ウラジオストクをはじめロシア極東は「日本に一番近いヨーロッパ」と呼ばれます。しかし、ロシア人のメンタリティーはヨーロッパの人々とは明らかに異なります。百聞は一見に如かず、是非一度ロシアを訪問され、自ら体験されることをお勧めします。

(2017年11月9日・公開フォーラム)

筆者略歴(たかはし じゅん)

1998年ジェットロ入構。2004年から05年までロシア語研修(タタルスタン共和国カザン)。05年から07年に海外調査部ロシア極東担当。09年から12年までモスクワ、12年から14年までサンクトペテルブルク駐在。14年から17年までジェットロ諏訪支所。17年7月から現職。ロシア本体、ロシア極東、ロシアCIS地域経済統合を担当。

キューバ再訪記

社会主義最後の「改革・開放」はどこまで？

田畑光永（会員）



私はさる2014年春、初めてキューバを訪れる機会を得て、かの地を踏み、その顛末を本誌同年4月号に「陽気に・貧しく・たくましくーキューバ社会主義の今」というタイトルで書かせてもらった。あれからまもなく4年になるが、その間の変化を知りたくて、昨17年10月に再訪した。いささか遅くなったがこれはその報告である。

なぜキューバに関心を持つか。前の一文にも書いたが、100年前のロシア革命でこの世に誕生し、その後数十年間、地上のかんりの部分に確かに存続した社会主義という社会体制が、1990年代に至って実質的にほとんど姿を消してしまった中で、ひとりキューバのみがともかく社会主義体制を維持しているからで

ある。

同時に、そのキューバも世の大勢に逆らえずということか、中国がかつて改革・開放路線に踏み切ったような形で自己変革に乗り出したというニュースに接し、なにはともあれ、今のうちに見ておかねばという焦りにもかられたのであった。

キューバ共産党が「社会経済体制の抜本的転換」を決定したのは2011年4月の第6回党大会である。その転換とは社会主義の基本原則（たとえば「各人は能力に応じて働き、労働に応じて受け取る」とか、「計画が支配する中で市場の諸傾向が考慮される」など）は維持しつつも、自営業の範囲の拡大、住居や車の売り買いの自由化、外国資本の導入、開発特別区の設置といった「改革・開放」

策の導入である。

前回の訪問は転換がスタートしてからすでに3年になるという時であったが、われわれの受入れ団体「キューバ諸国民友好協会」のアリシア・コレデラ副総裁によれば、「改革は全体として思うようには進んでいない。意識を変えなければだめ、何が欠けているかを認識することが大事」ということであった。

では、さらに3年が過ぎた現在はどうか、である。しかもこの間、国の内外に大きな変化があった。

まず1959年のキューバ革命以来、激しく対立してきた米政府が方針を変えた。14年12月、オバマ大統領が対キューバ関係改善方針を打ち出し、それによって翌15年7月、55年ぶりに対米外交関係



ハバナの旧市街と巨大なクルーズ船、ガリバーの世界のよう

が復活した。16年3月にはオバマ大統領がキューバを訪問した。

国内では16年11月、キューバ革命の象徴ともいえる指導者、フィデル・カストロが90歳で死去した。キューバと言えば反射的にカストロの名前が浮かぶほどに影響力の大きな指導者の死はこの国の大きな変化を予感させた。

ところが時を同じくして、何事につけ前任者の路線を激しく非難してやまないドナルド・トランプが米大統領に当選し、

オバマの手でせっかく改善したはずの米・キューバ関係に再び暗雲が兆している。在ハバナの米大使館に音波攻撃がかけられたという正体不明の理由で、現在は双方の大使館には館員が1人ずつしかいないという異常事態に陥ってしまった。オバマ時代に緩和に向かっていたキューバに対する経済制裁も逆に強化されつつある。変化を求めるキューバに逆方向の力がかかっているような状況といえる。

3年経って……

さてそこで今回の見聞である。第一印象は「3年経っても、たいして変わっていないではないか」というものであった。勿論、変化がなかったわけではない。例えば、前回びくりした「トラック・バス」がどうやらハバナからは姿を消したようだったこと。トラック・バスというのは、トラックの荷台の後ろにはしごをかけて、人が乗り降りできるようにした公共乗物で、一応、布張りの屋根とベンチ式椅子があるとはいえ、いかにも不便で乗り心地の悪そうな代物であった。馬車はまだ見かけたが、こちらは観光客用に特化したようであった。地方ではどうなのかは分からない。

それから観光客が大きく増えた。ハバナの名物ともいえる何十年も前の古い骨董アメリカ車のタクシーに何人も若者が乗り込んで騒ぎながら走っているのはまづアメリカ人である。その骨董タクシーを尻目に新しい小型のタクシーもまた急速に増えていたことは観光客増加の反映であらう。

それなのに、なぜ「たいして変わっていない」と感じるのかと考えてみたら、目にしているキューバの姿を、私が勝手に40年もの昔、毛沢東の革命路線から鄧小平の改革開放路線へと転換した当時の中国と比較していることに気がついた。

1978年末の中国共産党第11期3中全会というのが、中国の変身のスタートだったが、これは本当に変身であった。当時、私はテレビ局の特派員として北京に駐在していたが、仕事上接する中国の放送関係の人たちが、それまでの大所高所の友好万歳路線から、簡単な素材の提供を頼んでも突然「お金第一」に態度が急変し、こちらは勝手が違って面食らった。

おかっぱ頭にズボン姿が定番だった娘たちは、パーマをかけスカートをはいたとたんに人が変わったようだったし、男たちはそれまで関心がないような顔をしていたのが、急に「あんたの月給はいく

らだ」とか「東京では自家用車を持っているのか」などと、あけすけに懷具合を聞いてくるようになった。

たいてい変わっていない、という私の印象は、そういう当時の中国の変身ぶりと比較してのことであるから、客観的ではない。それではキューバ自身の目指すものが、この間にどれほど実現したかを、乏しい見聞からではあるが探ってみよう。その上で社会主義をやめるとはどういうことか、をあらためて考えてみる。

GDPと為替

となると、まずはやはり経済状況は好転したかどうか、したとすればどのくらい好転したか、である。

今回も前述の「キューバ諸国民友好協会」が準備してくれた講師（国際関係研究所のニディア・アルフォンソ教授）のレクチュアを受けたが、氏によれば「昨年（2016年）のGDPは890億ペソ」ということであった。

この数字がじつは厄介である。キューバは外貨不足から、外貨経済と現地通貨経済の二重通貨、二重為替の二重構造をとっている。具体的には外貨を現地通貨に交換した際に渡されるのは米ドルと等

価の兌換ペソ（CUC）通貨、一般のキューバ人が使っているのはキューバペソ（CUP）の通貨である。政府間の公式レートでは1ペソ（CUP）＝1米ドルであるが、国内では1CUC＝24CUPと決められている。

こうした政策は珍しいものではなく、改革・開放初期の中国では「外貨兌換券」と称する外貨と交換する専用通貨を発行したし、北朝鮮では現在、公式為替レートでは自国のウォンをほぼ日本円と等価に設定しているが、実勢と大きくかけ離れているために外国人が外貨を国内通貨へ両替することを認めず、外国人には外貨を受け取る特別の商店や食堂で買い物や食事をさせる。

キューバの場合、890億ペソ（CUP）を公式レート通り890億ドルとして、1人あたりGDPを計算すれば、人口を1124万人（2015年・国家統計局）として7918ドルとなる。立派な中進国の水準である。しかし、国内レート（1ドル＝1CUC＝24CUP）で計算すれば330ドルにしかない。貧困国と言っている。

実体はこの間の、それも中間からだいぶ330ドルに近いほうであろうと推測するところまでしかできない。

それでは経済活動の量の動き、つまり成長率の推移はどうか。公式レートのGDPの推移は明らかにされているので、それによるとキューバ版「改革・開放」がスタートした2011年の689億ペソから16年の890億ペソまで5年間で200億ペソ（約30%）の増加であり、悪い数字ではない。ただ2015年は4・4%成長という好成绩であったのが、16年はハリケーン「マシュー」の直撃を受けたために0・9%へと落ち込み、昨17年の前半もアルフォンソ教授によれば1・1%の伸びにとどまったということなので、ハリケーンの痛みはかなり大きかったと言える。

観光から民営化

GDPはGDPとして、もっと目に見える変化はないか。アルフォンソ教授も指摘していたが、その1つに観光客の激増が挙げられる。改革スタートの2011年の外国人訪問者数は271万人、それが14年にやっと300万人とここまでは動きは鈍かったが、その後、15年には352万人へ伸び、16年には400万人に到達した。米国からの観光客は制裁の復活のおかげで伸び悩んでいるが、その



ハバナの古い砦と観光客

他の国からの観光客は増え続け、17年は7月まですでに300万人を超え、通年では500万人にも手が届くかという勢い、という話であった。

確かにこの分野が改革の先兵の役割を果たしているように見える。外貨と同じ価値を持つCUCを手でできる業界に人が殺到するのは必然である。先ほど改革の具体例として、自営業の範囲の拡大、住居や車の売買の自由化を挙げたが、観光客向けの民営のレストラン「パラダー

ル」が増加している。キューバの普通のレストランのサービスがとくに悪いとも思えないが、民営ではよりきめ細かいサービスが人気を呼んでいるという。そこで、当初はお客の座席数を20人程度に制限していたのが、最近では50人程度まで認められるようになったと聞いた。

内向けと外向けの二重為替レートが人々を外貨のあるところに引き寄せる例としては、観光客の通訳として1日働けば大学教授1月分の給料に匹敵する報酬が得られるそうで、外国語を使える教授、医師といった知的職業から観光業界へ転職する人が続いているそうである。社会全



サンタクララ市の街頭

体としては喜ばしくない風潮であろう。

また、宿泊施設として日本流に言えば民泊が大流行している。街を歩けばこここに「HOSTAL」という看板と小さな標識をつけた民家が目につく。外国人が泊まれる民宿である。キューバのホテル全体を云々することはできないが、中には社会主義の悪い点を引きずったままのところもある。われわれもサンタクララという街のホテルがそれにあたってしまう、暗い、汚い、クーラーがうるさい、お湯が出ない……とたちまち不満が噴出した。しかも2泊しなければならぬ。

そこで街に出た時に、何人かで民宿を見学しようとその一軒を訪ねた。先方に泊り客かと期待を持たせたのは悪かった



民泊の看板と標識（右側）



見るからに清潔な室内

のだがこころよく中を見せてくれた。部屋数は4つくらいで、各部屋は小さい前室と寝室、それにテレビ・洗面所・トイレ・シャワー室がついている。食事はスペイン風の中庭を囲むようにそれぞれの部屋の前のテラスで摂る。全体的にすこぶる清潔で、快適そう。期せずして「今度来ることがあったら絶対民泊だ」という声が上がった。宿泊料金は1泊20〜30CUC（＝ドル）といったところが多いようだ。

観光といえば連想するのが観光バスであるが、自動車売買の自由化も改革・開放の目玉の1つであった。キューバでは古いアメリカ車が走っていることが有名だが、自動車の輸入や売り買いが自由に出来なかったことがその理由である。

ジェットロ（日本貿易振興機構）の「キューバの政治・経済の概況とビジネス機会」（2017年4月）という資料（以下「J資料」）によると、キューバ政府は2013年の政令で個人の自動車売買を自由化した。ただし、輸入そして国内販売は運輸省が定めた条件にしたがって、外国貿易・外国投資省の許可を得た国営企業のみが扱えることされ、さらに消費者への小売価格は「車両価格×8＋関税」（関税は1500〜3000ccのガソリン車で15%）とべら棒な高値に設定されているから、個人が新車のマイカーを持つことは容易でない。まだまだ（米車に限らず）中古車、大古車の天下は続くだろう。

それでどのくらいの車がキューバに入っているか。「J資料」によれば、乗用車は新車、中古車合わせて年間5000台前後、バスと貨物自動車が各2000台前後というところ。乗用車とバスの15年の実数があるので、興味深いのでご紹介

する。

15年の乗用車の輸入台数は合計4452台、そのうち中国からが3101台と3分の2を超えている。バスは合計1816台のうちなんと1696台が中国から。われわれが乗ったバスもすべて中国製であった。日本からはわずか2台であった。車に限らず消費物資では中国の進出が目覚ましい。

ついでだから同資料で、2012年（つまり改革2年目）の国勢調査による家電の普及率を見ておこう。当時の日常生活の一面がうかがえる。

扇風機171・9%、冷蔵庫81・0%、テレビ78・3%、ミシン30・1%、固定電話23・7%、携帯電話22・8%、電子レンジ15・7%、エアコン15・5%、パソコン11・8%。

このほか家電ではないが、自転車36・3%、自動車・ジープ4・6%、オートバイ3・8%、である。

キューバの特区

ところで、中国の改革・開放といえば、その象徴として深圳や廈門の経済特区が有名である。しかし、これは中国の専売ではなく、それ以前に台湾、韓国といっ

たアジアの新興経済体（ニュー・エコノミーズ）と言われた国、地域の発展にこうした特区が大活躍し、むしろ中国はそれらの後塵を拝して、1979年に特区の創設をきめたのであった。言わば、低開発状態から脱皮、飛躍するための特効薬として、外資にさまざまな特権、特別待遇を与えて工場を誘致し、外貨獲得、技術の導入、雇用の創出などを図る政策である。

キューバも作った。2013年の政令により設置された「マリエル開発特区」である。場所はハバナの西45キロほどのカリブ海に面した一帯である。設立目的として輸出促進と輸入代替、技術移転、外資誘致、雇用創出、インフラ整備、物流システムの創造などを掲げ、特に物流、先端的な製造業、バイオ・製薬の3つの産業を重視している。（「J資料」）

ところがこの特区、どうも泣かず飛ばずといった状態らしい。設立4年後の17年3月現在で進出企業は100%外資が13社、合併企業が6社、資本関係不明が2社、100%キューバ資本が4社の25社止まり。うち製造業は9社、それも食肉加工、使い捨て注射器、紙巻タバコ、塗料といったもので、先端的な製造業とは縁遠い。（同）

マリエルからそう遠くないサンクティ・スピリトゥスという街に住み着いてボランティアで日本語を教えている松尾光さ（あきら）んという日本人がおり、この人に特区のことを聞いてみたが、「さっぱり存在感がない。名前を聞くことはほとんどない」ということであった。

ほかの国や地域では特区の果たした役割は大きかったが、キューバの場合、今のところ発展の先導役をこの政策が務めているようには見えない。それにはさまざまな理由があるのだろうが、今後、この特区がどういう道をたどるか、まだ予測はつかない。

改革・開放にむけてスタートをきったはずだが、これまでを総括すればキューバはかなりのスロー・スターターとお見受けした。

アキレス腱の農業

じつはキューバ経済には古くからの懸案がある。食料の自給ができないのである。自給率は20%程度と聞いた。亜熱帯に属し、平均気温は摂氏25度以上、5月から10月までは降水量もたっぷり。日本の本州の約半分の広さに1100万人強の人口。この条件で食料の自給が出来る

いというのは解せない。

前述のアルフォンソ教授は、その理由として、島国のため地下水に海水が浸潤しているところが多く、肥沃な土地は30%ほどしかない。その塩分を除くプラントを2017年は11か所作ったがまだまだ足りない。高い山がないので大きな川がなく、淡水資源がとぼしい。水力発電ができない……などを挙げた。

なるほどそういうものかとも思うが、かつてのサトウキビ畑が、荒れたままになつているところも多く、その中に昔はサトウキビを満載した貨車が走っていたであろう線路が錆びたまま放置されているのを随分見かけた。

また中国の例で恐縮だが、中国の場合、改革の決め手は農業を集団経営から個人経営へ戻したことであった。生産手段の共有という社会主義の建前上、この転換は決断を要するが、1980年代前半にこれを実現したことで、生産性が上がり、農村に「万元戸」（収入が1万元以上）が出現してニュースにもなった。また農村に「郷鎮企業」と呼ばれる小規模工業が起こり、その中から大きな家電企業が生まれたりもした。

キューバの場合、国営農場を協同組合経営に分割するところまでは踏み切った

が、今のところなかなか個人経営への転換には踏み切れないというのが実情のようであった。

「J資料」には、キューバの主要輸出品として「鉱産物（ニッケル等）、医薬品、タバコ、砂糖、魚介類」が挙げられ、主要輸入品には「燃料類、機械、輸送機械、食料品」が挙げられている。キューバの貿易構造は長年、赤字体質である。「J資料」によれば、2015年の貿易収支は輸出33億5000万ペソに対して輸入は117億0200万ペソ、83億5200万ペソの赤字である。輸出入額の約2・5倍である。食料輸入は輸入総額の15%程度であるが、農業を改革して食料自給率を高めることは経済の「抜本的改革」の前提であろう。

カストロと毛沢東

ここまでキューバの「変化」を概観してきたが、私の印象ではその変化は予想ほど速くない。そのおかげというべきか、キューバ社会主義の生命線ともいえる医療制度も、一部に医師の転職といった現象が見られるにせよ、今のところ根幹はゆらいでいないようである。

もっとも、速い、遅いといったところ

で、勿論、客観的な基準があるわけではない。たまたま私がそばで観察することができた1970年代末からの中国の変化と比べての印象にすぎない。巨大な大陸国家と人口ではその100分の1以下の島国では人々のものの感じ方、動き方が違って不思議はない。大国の方が動きが速く、島国のそれが遅いというのは予想外ではあったが。

しかし、両者を比べている中で、私にとって大きな発見があった。発見といってもこれまで不勉強で知らなかっただけのことなのだが、カストロのある発言に驚かされたのである。

それは予習として読んだ後藤政子著『キューバ現代史―革命から対米関係改善まで』（明石書店・2016年）にある、2005年11月にカストロが母校のハバナ大学に招かれて行った講演である。驚いた部分を同書から引用する――

「このときカストロは学生に対し、『革命は崩壊するか』と質問を投げかけた。『ノー！』という会場からの叫び声に対し、『革命は崩壊するかもしれない。破壊するのは彼らではない。われわれ自身だ』と答え、『もはやこれまでのような体制は維持できなくなった。21世紀に相応しい、まったく新しい社会主義とは何

か、若い諸君は知力を尽くして考えてほしい』と訴えた」（231頁）

ここで「破壊するのは彼らではない」の「彼ら」は長年、敵対関係にある「米帝国主義」を指す。帝国主義に倒されなくて、革命を破壊するのは「われわれ自身」だと言う。

なぜか――

「われわれの最大の誤りは『社会主義とは何かを知っている』『社会主義社会の建設の仕方を知っている』と考えたことだ。マルクスの理論もレーニンの理論も、それぞれの時代の条件の下で成立したものであり、普遍化できない。……

われわれは、いま、ようやく社会主義建設のあり方について明確な考えをもてるようになった。……一人でやっていかなければならない。誰かが助けてくれると思ったら間違いだ。自分の責任でやらなければならない。

だが、革命は崩壊するかもしれない。破壊するのは彼らではない。われわれ自身だ」

そして、こう続ける――

「労働意欲は低下し、腐敗がはびこっている。管理者ぐるみで企業から横流しされる物資。それを公然と売る闇市場。盗品を食材に使い儲けるレストラン。国

の補助金で手に入れた住宅を他人に高く売る市民……」(234頁)

著者によれば、この当時、カストロは「病に陥り、2006年7月に国家評議会議長と共産党第一書記の職務を、弟の(傍点は引用者)ラウル・カストロ国防相に移譲する8か月前のこと」であった。カストロは晩年にいたって、社会主義について「知らない」ことに気づき、しかも助けになる仲間もいないことを悟り、「われわれ自身が革命を破壊する」可能性にまで思いつめた。

これを読んで、1950年代末、大躍進運動や人民公社化の音頭をとり、挙句、国を大飢饉に追い込んだ毛沢東の述懐を思い起こした。

「社会主義建設について、われわれにはまだ大きな盲目性がある。われわれには社会主義経済はいまだ多くが認識されない必然の王国である。私自身、経済建設における多くの問題が分からない。工業も商業もよく分からない。農業は多少分かるが、比較的分かるというだけで、知っていることは多くない。その農業にしても土壌学、植物学、作物栽培学、農業化学、農業機械などを知らなければならぬ。また農業内部の各分業部門、例えば食糧、棉、油、麻、糸、茶、糖、

野菜、煙草、果樹、藥草、雜などがあり、さらに牧畜もあれば、林業もある」(『毛沢東 鄧小平 論中国国情』中共中央党校出版社・1992年・459頁)

これは1962年1月、毛沢東の「中央工作会議における講話」として知られる講演の一節である。50年代末に展開された大躍進から人民公社化運動が「3年続きの自然災害」とされる農業不振を招き、2000万人ともそれ以上とも推定される餓死者を出したことを受けて、毛沢東が自己批判したと言われるくだけである。

カストロも毛沢東も武力闘争において傑出した指導力を発揮して、革命を成功させ、新国家を指導する地位についた。おそらく2人とも、命を的の武力闘争に比べれば、弾丸の飛んでこない状況の中での、そしてそれまで民百姓を搾取していた階級がいなくなった後の建設は容易に進むと考えたであろう。

しかし、実際はそうではなかった。毛沢東は自然についての自らの知識の乏しさを嘆き、カストロは武装闘争で自分を支持してくれた民衆の日常に戻った後の度し難さを嘆いている。共通するのは社会主義が分からなかったということである。結局、これが地上から社会主義が姿

を消す共通の理由であろう。

社会主義を経験した後の国柄はそれぞれである。選挙で政権を選び、市場に経済を委ねた国もあれば、社会主義の看板を残して「プロレタリア独裁」のテーゼを固守して独裁体制を続ける国もある。キューバがこの後、どんなコースを歩むのか、予測はつかない。

キューバでは来る4月18日の人民権力全国議会において、ラウル・カストロ国家評議会議長が引退し、新しい指導者が選出されることになっている。今のところ後任の有力候補者としてミゲル・ディアス・カネル・ベルムデスの名前が挙がっている。同氏は1960年の生まれで57歳。「キューバ革命未体験世代」の筆頭格と言われ、2013年から集団指導機関である国家評議会と行政政府である閣僚評議会の両方の第一副議長を務めている。

同氏が選ばれるかどうかはともかく、キューバもいよいよ名実ともにポスト・カストロの時代に入る。世界に多くのキューバ信者を生んだ優れた医療制度を含め、キューバ社会主義がどういう変容を遂げるかは新世代の手に委ねられる。

不思議の国、イラン紀行

中川啓造（会員）

はじめに

イランと聞くと、どんなイメージが湧きますか？
まずペルシアじゅうたんが一般的だと思います。

サッカーの好きな方は、アジアNo.1の実力国で2018年ロシアで開かれるワールドカップ世界大会にアジアで一番最初に名乗りを挙げた国。

野球ならば、米大リーグで活躍する、ダルビッシュ有のお父さんがイラン人。

政治に関心がある方は、イスラム教シーア派の盟主。

また、歴史に興味がある人ならば、世界最古の文明で4大文明の一つであるメソポタミア文明の発祥地であるイラクの隣りに位置し歴史と伝統のある国。
そんな中で僕がイランに興味

をもったきっかけは、2年程前に行ったモロッコの途中経由地であるドーハ空港で出会った、顔から足元まで黒づくめでおった（チャドルという衣服）女性でした。どちらの国の方ですか、と尋ねたら「イラン」と言われ、が然

どんな所かに興味をもった次第です。そこ

で、かの地を見たくなり、早速航空券を手配し、この1年間で2回訪ねました。この2回で主だった所はほとんど見て回りました。



チャドルを着た女性たち

そして感じたこと

1. 公の施設に行くと、必ず最高指導者であるハメネイ師とローハニ大統領の肖像画が正面に並んで大きく飾ってありました。

帰国後調べてみると、政治が二頭立てによって行われており、専門家会議によって選出された最高指導者が国の全般的政策方針の決定と監督について責任を負い、こちらは終身制で任期はないとのこと。また、国民による直接普通選挙によって選ばれた大統領は、最高指導者の専権事項以外で、執行機関たる行政府の長として憲法に従って政策を執行する、とのこと。任期は4年で3選はダメとのこと、要は、国の重要な根幹をなす政策は最高指導者が決め、大統領はその決定に従って補佐をして仕事をを行う、ということなのです。

2. イミグレーションでの出入国管理。

イランに入るにはビザが必要なのですが、僕は空港でアライ

バル・ビザを申請してもらいましたが、その際、ビザ代他に国内旅行保険代としてそこそこのお金をドルもしくはユーロ払いで取られました。外国へは250〜260回行っているのですが、初めてのことで。これは恐らく欧米の経済制裁によって経済が疲弊した結果外貨が足りなくなり、その埋め合わせをするために入国する外人から税金として徴収しているのではないかと考えられます。僕は2回目の入国の際、日本で加入した旅行保険の写しを英語版で提出しても認められませんでした。

3. 旅行者、特に日本人に対しては非常に親日的でした。たとえば、名所旧跡を訪ねている途中迷子になり、歩いている人に道を聞くと現地まで案内してくれました。

また、街で人だかりが立っているアイスクリーム屋のそばに立っていたら、買いに来た女性が僕の方を買ってくれたことがありました。ただし、油断大敵。古都エスファハーンで昔の公衆浴

場跡へ行った帰り、泊まっているゲストハウスへの道が分からなくなり、折よく居合わせた2人連れのバイクに同乗したところ、人気のない所へ連れて行かれ身の危険を感じたので、急いで防犯ベルを鳴らし事無きを得ました。

4. 2とも関係するのですが、1988年に終了したイラン・イラク戦争後、イラン国内では不景気のため仕事がなく、たまたま日・イが取り決めた相互免除ビザのため日本で働くことが出来、かなりのイラン人の方が日本で職を得ることが出来ました。丁度、上野公園でのイラン人による偽造テレカの販売が話題になった頃です。その結果、日本語に堪能な中年男性が増え、街を歩いていると結構日本語で話しかけられることが間々ありました。

5. イスラム教を国教としてある国ですから当然至る所にモスクがあり、1日5回は必ず聖地メッカに向かって礼拝をしていました。イスラム教信者数最

大の人口を誇るインドネシアと比べてみると、その点は徹底しているように見受けられました。

6. 5に關係することですが、この国の権力者はイスラム教という宗教を国を統治する上でうまく利用しているな、という感じがしました。1日5回の礼拝によって人々の不平、不満をガス抜きをし、聖地マシュハドへの巡礼(1日10万人以上の参拝者)、そして年何回かの宗教的行事、2016年に訪れた際には「アシュラ」という殉教者を崇める行事にたまたま出くわしました。街の道路の目につく所にジハードという聖戦で身をささげた男の人が大きな顔写真の立看板で飾ってありました。



街で見かけた殉教者の立看板

たまたま公園で出会った若者に話しかけたところ、「この国

で生活するのは息苦しい、外国で住みたい」という人が何人もいました。

7. アルコールが禁止されている禁酒のこの国では、ストレス解消の方法として庶民は、

①休みの日には公園などの空き地で家族・知人が集まってバーベキューをよく行っており、僕はエスファハーンで土曜の午後、公園を歩いていたら見知らぬイラン人に呼び止められ、BBQをご馳走になりました。



BBQをしていた家族にご馳走になった

②各都市にあるバザールには夜間ないしは休日の日家族そろって出かけ、ショッピングを楽しむ人たちがにぎわっていました。

③イラン人は甘い物が大好き。街の到る所に洋菓子店があり、歩きながらソフトクリームを頬

張る人が多く見られました。その影響か、生活習慣病予備軍と思われるメタボの方がたくさん見受けられました。

おわりに

先般、アメリカ大統領トランプがエルサレムをイスラエルの首都として認めアメリカ大使館を、今年2018年5月中旬に移転すること。また2月中旬、イスラエルのネタニヤフ首相がドイツのミュンヘンで開かれていた安全保障会議で演説し、イランへの先制攻撃をすると公言しました。どうやらこれが発火点となって、いざ第5次中东戦争が、イラン+パレスチナ+V S イスラエル、サウジアラビア間で起きる予感がします。時期はズバリアメリカ中間選挙の前、10月ごろが可能性あり。単なる杞憂で終わればよいのですが、もし起こったら一大事。

イランに関心のある方は、今の内にかの国へ出来るだけ早く訪問されることをおすすめします。

合掌



編・訳 上松玲子

一酸化炭素中毒に警報

ラジオ番組「中国之声」から。広西チワン族自治区政府の発表によると今年になって昨日の午後4時現在まで、省内では営業所以外で159件の一酸化炭素中毒事件が起き、104人が志望、155人が入院治療中という。

過去5年の全国のデータでも営業所以外での一酸化炭素中毒事故はその96%が一般家庭での暖房や温水器が原因の事故であり、冬と春に集中している。広西ではこのところ過去最低気温

の日が続き、暖房や入浴用に自家暖房を使う機会が増え、特に柳州や南寧などの大都市に集中し、閉め切った室内での事故もピークを迎えている。

毎年の事故があるのに、一向に改善されない。安全意識が低いことのほかにも居住環境、安全基準を満たさない燃焼設備も原因となっている。流動人口の多い南寧市の西郷塘区のある団地では建て増しした団地に、多くの農村から来た労働者が暮らす。室内は小さく区切られ、シャワー室には排気口もなく、窓の外は隣の棟の外壁が迫る。一酸化炭素を排出することから国が既に生産も販売も禁止している直排式熱水器が、いまだに多くの部屋で使われている。安い熱水器は農民工には人気の品で、都市部の郊外の電器店で今も売られており、危険性を知らせるポスターも効果がない。

春節期間中更なる事故を防ぐため、柳州市、桂林市、南寧市は安全問題を統括する副市長が自治区の人民政府と緊急の会談

を行っている。

〔央広網〕2018年に2月12日〕

都会で団欒も

中国の正月、春節を子どもや孫と過ごすため、故郷で帰りを待つのではなく、はるばる子どもたちが暮らす都会にやってくる老人たちもいるという。正月の過ごし方も益々多様化しているようだ。

団欒についてインターネットではこのような意見がある。どんな形式であろうと、家族が一緒に楽しく過ごせればよいのではないか。

周りにも子どもたちを訪ねて都会に行く人が多い。何より遠出ができるのは健康だという証だ。健康長寿の親と親孝行の子どもたち。いいことではないか。

うちの子は、正月休みの間仕事が入っていて、ビデオチャットで「おめでとう」を言い合うしかない。だが、春節に団欒できるかどうかということよりも、子どもがしっかりと仕事をして、幸せに暮らしていることの方が

大切だと思う。

〔経済日報〕2018年2月8日〕

テレビ販売数落ち込む

テレビは今やパソコン、スマートフォン、タブレット端末などに取って変わられようとしている。2017年中国のカラーテレビ市場はこの十数年で一番の冷え込みとなった。カラーテレビの販売台数は2016年に500万台を超え最高台数を記録したが、昨年の販売総数は4752万台で、前年同期比6.6%の落ち込みを見せ、2003年以来一番の下げ幅を記録した。一度は一世を風靡したインターネットテレビも画面価格の高騰で参入業者も淘汰され、袋小路に入った。

以前のような人気ドラマを家族と一緒に見る光景も、それぞれがスマホを持つ姿に変わり、家庭でテレビは飾り物になった。

2015年から販売価格の下落も加速し、業界は低利益の時代に入った。昨年の販売台数に占めるインターネットテレビの

台数は10%、輸入品は15%、国産カラーテレビが75%である。

来年は多少の回復は期待できるものの、やはり大変な一年になるだろうと専門家は見ている。

『金陵晩報』2018年2月8日

伸びるネット通販

パソコンからインターネット通販で正月用品を買ったり、携帯から家事代行サービスを頼んだり、多くの市民が家にいながら正月準備をしていることだろう。国家统计局北京調査チームの発表によると、2017年北京市民のインターネット通販による消費金額は一人平均972人民元ということだ。前年同期比16・7%の伸び、と伸び率でも前回を9・5ポイント上回った。特に都市部での伸びが高い。スマートフォンやアプリの進化、インターネット通信の高速化がインターネット消費市場の拡大を促進している。昨年では7割の家庭で携帯電話からインターネットに接続できるサービスに加入、都市部では74%に達して

いる。また、消費内容も多様化し、単に商品を購入するのではなく、情報、旅行、文化娯楽など物ではないサービスに対する支出が物質性の消費を上回り、52%と半分以上を占めている。

『北京日報』2018年2月11日

ペットが増えて

四川省出身の王さんは春節の帰省を前に、昨年末から飼い始めた生後4か月の愛犬をどうするか悩み続けている。仕事の時以外はずっと一緒に愛犬を連れて帰りたいが、アレルギーの家族がいて連れて帰れないのだ。

自宅から半径3キロ以内のペットショップや動物病院は全て問い合わせた。旧正月の間はサービスがないところや、数日しか預かれないところ、もう予約がいっぱいのところ、ケージが狭すぎるところなど、なかなか決まらない。インターネットで調べてみたが、情報が多すぎて益々混乱してしまった。試しに預かってくれる個人に連絡をとってみたが、何かあったときどこまで

信用できるのか、やはり専門業者の方が良いのではないかと堂々巡り。

同様に旧正月休暇中に帰省や旅行を計画していて、ペットの預け先に悩む人は多い。ペット同伴できる宿泊施設は多くない。この時期は皆それぞれ予定があるので、友人も頼りにくい。こうして、ペットホテルの需要が最も多い時期になる。小型犬なら一晩40元から60元、中大型犬なら80元から120元が一般的な価格だ。業者にしてみれば、かき入れ時ではあるが、場所にも限りがあり、正月の間は人手も足りない。多くの店では幼犬や高齢犬は受け入れないし、予防接種などの証明がないと受け入れない業者も多い。

そんな中、一般家庭での一時的預かりが脚光を浴びている。その多くが自身もペットを飼っており、必要な環境と飼い主としての知識がある。ただし、預ける際は、事前に下見すること、ペットの健康診断をしておくこと、契約書を交わすなどがトラ

ブルを未然に防ぐために必要だと専門家は指摘している。

『山西晩報』2018年2月12日

海峡渡れず10万人足止め

旧正月の期間、濃霧のため海南島から海峡を渡ることができず、多くの人や車両が海口に足止めされた。18日からその数は最高時で2万台が20キロにわたる列を成し、10万人が影響を受けた。19日より海南省海口市政府は第一級緊急対応を発動、13万8千台の車両と、71万人の旅客の輸送に全力を注いだ。交通、交通警察、環境衛生、海運部門、軍、ボランティアなどのべ5万8千人が動員され、24時間体制で支援、誘導、医療援助、衛生管理、秩序の維持に全力であたった。7万6千箱の水や、9万箱のカップ麺、ビスケットなどが配られ、49軒の旅館も協力、23か所の医療ポイントが増設された。2月25日、海南省海口市政府は、通常の輸送量に戻ったと緊急対応を解除した。

『中国新聞網』2018年2月26日

コラム

腰折れ文 八、

渡邊澄子（会員）

どうしてこう次から次へと我慢のならぬことが起こるのだろうか。名護市長選挙結果には度肝を抜かされた。祝杯を挙げるつもりでいた深夜、結果に呆然。涙がこぼれた。何故？ 何故？ 与党推薦候補は辺野古問題には触れず、地域経済の活性化を前面に掲げ、自民・公明の大きものを応援に差し向け、稲嶺氏当選でカッとした政府交付金をたっぷり出すと宣伝しまくったらしい。戦時中は本土の人柱にされたのに戦後に至ってなお事情は変わっていない。米軍機からの落下物、不時着のみならず人権蹂躪事件など危険が日常化している。米軍の軍属扱いに日本政府は毅然と対峙できない。「米軍の増長は政府の責任」（2・15、『琉球新報』の一語に尽きる。それにして、名護市民がお金に釣

られたとは思いたくない。負けても辺野古基地賛成が民意ではないと分析されているが、でも、負けは負け。自民党の権力・金力による狡猾な策略にたぶらかされてしまったのだろうか。哀しい。「力による平和」論者のトランプ大統領が「脱オバマ」から小型で使いやすい新型核兵器開発（NPR）を打ち出した。小型だろうが核の恐怖を体験している日本は強固な同盟国のつもりなら諫めるべきなのに「核の傘」論から肯定している。悲惨な戦争に突進した右派を引き継ぐ政治家の多い自民党の中で常識・正論派として歯止め役の希望を托していた河野太郎が外相になったら途端に変わった。権力のおいしさを知ると人間は変わるのだろうか。情けない。ノーベル賞の季節だった。平

和賞は国際NGO「核兵器廃絶国際キャンペーン」（ICAN）が選ばれたのは世界の叡知の健全さを示していて、被爆者・反核論者の歓声に私も唱和した。米国の「核の傘」への依存から核禁止条約の交渉会議に不参加の日本政府への怒りは収まらない。核大国のトランプ大統領は安全保障とビジネスを絡めて守ってやるから金を出せ、武器を買えと迫り、安倍首相ははいはいと応じている。その金は、安倍さん、あなたのお金じゃないのよ。ノーベル文学賞を受賞したカズオ・イシグロさんは長崎生まれで五歳まで長崎で育ち、その後日本人の両親と共に渡英した日本人だが英国人なのだ。何国人ではなく個人であることが示された。在日韓国人の二世・三世が帰化した例は多いが、日本人になっても差別に曝されている、作品には被差別者の苦悶が色濃い。英国に人種差別は無いのだろうか。全く未知の作家だったので彼の作品『日の名残り』を読んでみた。日本では馴染み

のない執事の私語りで、まさに英国だった。受賞式後の晩餐会で子どもの頃、ノーベル賞は「ヘイワを広めるためにつくられた」と母から聞いたと日本語を交えて挨拶したという。語り手は優秀な執事だ。和平問題にも言及されていて、奥の深い小説として読んだ。あと一点だけ。振り袖販売・レンタル業の「はれのひ」が突然営業停止して騒動になった事件。成人式に晴れ着を賞め合う楽しみを奪われた女性たちの怒り、嘆きを想像して、商道徳皆無の業者に怒り心頭だが、毎年の成人式日にみかける個性埋没の誰もが同じ着物姿にはうんざりだ。レンタル料は四泊五日が普通で最安値が一式一万五千元位、着物他の高品化に比例して十万円以上になるとか。前金払いで着物を買う人もいる。ここでも貧富の格差がものを言うが、買ったら筆筒のこやしにならないかしら。あんな慣習は止めて服装は自由にすればと思ってしまう。もっと大事な問題は次回に。

陶々俳壇

兼題：「梅」「難」

席題：「あたたか・温いし」

○ 冴え返る日本全国交通難

浅春の芽吹き競ひて日に向ふ

長野宏太

細枝に列なす紅き梅蕾（京）

橋本紅杓

○ 紅の月の欠片や春寒し

上野京

一輪の蕾綻ぶ雪の梅

○ 春雪にちらりと緑はほゆるむ

佐藤若杉

梅散りて黒きしがらみ残りけり

鍋ものの殊に恋しき夜なりけり

☆ 只今の声や帰国子梅二月（まもる）（宏太） 鈴木南山

○ 君子蘭狭き和室をいよ狭く

走り根や白追ふ紅き梅の花（紅杓）

岡和水

雪に遊ぶ我を励ます曾孫かな

○ 白梅の大手門より学校区（由紀子） 戸部まもる

○ あたたかや湯のみ茶碗に口紅のあと

ゆつくりと暮れゆく浜辺鱈東風 馬場由紀子

白梅の含み風さへ触れ難し

☆ 最高点 ○ 由紀子選 （ ） 各特選

選後評

馬場由紀子

鹿之助七難八苦雪女

南山

「我に七難八苦を与たまへ」と三日月に祈った鹿之助。「難」のお題で「うきたか」と感服。何事にも真摯に向き合って努力をなせる作者から出た一句は胸をつ。

山宿の静かに熱き葱難炊

紅杓

「葱難炊」の構構が詠じた山宿を思わせる。更に「静かに熱き」と鍋の様子を描くことによって野趣あふれる葱難炊の旨味が伝わっている。都会の疲れは「うしろ」所で癒したいものだ。

梅の香や白き杖持て巡る人

和水

そろそろ梅の頃となる。春を告げる梅の香りは、古より日本人の心をくすぐるものだ。作者は健脚の持ち主であるが、ハンディを持つ方への眼差しは優しい。強く優しく生きこられた作者を思わせる一句。

雪国があつというまにこの多摩に

京

初めてとは思えない程きつりと詠まれている。想いを表現しようとする作者の感性が窺われる。雨は音がするけど、雪は音がしないから朝起きたらびびくりした。と作者はおっしゃった。その驚きをうまく表現した一句である。

生き難きこの世に生きてうららけし

若杉

この言葉はそれなりに人生を歩んだ者ばかりか言えないだろう。若い人が言っても通り過ぎてしまふが、人生の達人の言葉は重い。しかし、李語の「うららけし」が重すぎず、良い塩梅で読み手に伝わっている。

将棋指す雪の社の公民館

まもる

田舎の公民館は、その地のお社に設けられることが多い。氏神を祀るお社は昔から人が集まる。そこに公民館ができるのも自然の成り行きと思われる。将棋を指しているのは、同じ村の顔なじみだろ。今日の一番が気にかかる。

あたたかや若さの光るアスリート

宏太

平昌オリンピックが開催される。若い筋肉が躍動するオリンピックは老いの身には眩しく映る。もちろん勝てば嬉しいが、演技の美しさに感動できるのは「若い」がもたらしてくれる効果かもしれない。

陶陶句会にご参加を！

大内善一

わが国の俳句人口は1千万人を超えている。

私は俳句会と連句会、月それぞれ4回ずつ参加し、頭の体操に努めている。

日常生活の中から俳句の季語を見出し、その季語を入れて五七五音とまとめて俳句を詠む楽しみは格別である。

その句会や連句会を通じ、新たな友人を得ることにより人生の幅が広くなり、かつストレスを感じずすることも無い。ぜひ陶陶句会にご参加いただき、頭の体操をしませんか！

そもそも陶陶句会の前指導者、岩垂道子さんとは明治大学の同窓生の関係で、かつ勤務先が霞が関であったため、陶陶句会に誘われて参加し今日に至っている。

岩垂さんはご尊父様が満洲時代の高官であった関係で、本会と縁があった。

また、ご子息が高校に進学された折、自らも高校に進学し、さらに明治大学女子短期大学、大学文学部に進まれ、そこで私は知遇をいただいた次第である。

句会終了後、反省会の居酒屋で酒を酌み交わしたことは、今も忘れ難い思い出となった。反省会は現在も続けている。

カホ会通信

◆H30年度事業計画を立案中

2月の理事会で第1回目のたたき台を提案・検討した。本年は「日中平和友好条約締結から40周年」にあたり、様々なイベントが企画されているが、当協会も民間レベルでの善隣友好活動を推進すべく検討中。最終的には、5月の定時社員総会で報告の予定。

◆「近代日本」と「現代中国」に関する講演会が続く

当協会にとってキーワードの一つである「近代日本」に関する講演会が、1月24日学術顧問の加藤聖文氏によって開かれた。テーマは「満蒙開拓団から見る国策の本質」。満蒙開拓団は大規模な国策として展開されたが、国策は一度始めると止められなくなるという意味では現代的なテーマ（例・原発）でもある。「現代中国」に関しては、2月15日時事通信社の城山英巳氏によって開催された。テーマは「習近平の新統治モデル」。「習近平の新時代の中国の特色ある社会主義とは何か」に焦点

を当て、熱のこもった講演会であった。

◆中国医科大学学生2名が協会へ

昨年11月、中国医科大学学生一行12名が当協会を窓口「さくらサイエンスプラン」（日本・アジア青少年サイエンス交流事業）で来日したが、そのうちの2名の医大生が2月4日から1か月間順天堂大学で臨床実習（眼科・耳鼻咽喉科・形成外科）を行った。帰国を前に、実習内容の報告会と交流会を実施した。（表2写真）

会員だより

◎新会員

＜正会員＞ 林淑媛氏

同好会だより

＜謡曲会＞

4月17日例会 実施予定曲目

曲目	役割	地頭
嵐山	シテ村瀬 ツレ澤村 後ツレ堀野	宮下
千手	シテ神保 ツレ澤村 ワキ土屋	鶴川
杜若	シテ鶴川 ワキ土屋	堀野

みんなの写真館

オーストラリアの春・ジャカランダ（表紙）

練馬区と友好都市であるオーストラリア・クイーンズランド州イプスウィッチ市を15年前に初めて訪問した折、この木に出合いました。見たこともないような目の覚めるような色の花と大木に感激しました。南アフリカ原産のジャカランダという樹です。広場の一本も見事ですが、道の両側にそびえるジャカランダ並木のトンネルも圧巻です。静かな田舎町ですが、治安もいいし空気も環境も人々のハートも最高のこの街を訪れる時は、この花が満開の10月末と決めています。（塚原美津子）

キューバのタクシー（表4上）

こんなタクシーを見れば乗ってみたくなる。ハバナ滞在中、一度もつとでかいリンカーンのリムジンのタクシーに数人で乗り込んだ。男は大統領の、女性はムービー

ターの気分を味わいたくて。ところが音はうるさいし、坂道では急におそくなるし……あたりを睥睨する気分にはなれなかった。

駿馬も老いれば駄馬に等し、勿論、乗り手も。（田畑光永）

「染の小道」妙正寺川（表4下）

「東京の染色産業の中心地である新宿区落合・中井地区。川筋の染工場の職人たちが川のおちこちで染め物の水洗いをする様子は、身近な風景の一部でした。今なお活動を続ける染の職人と街の商店、住民が一体となり、染色が盛んだった昭和30年代頃の記憶を現代に引き継ぎます」（「染の小道」実行委員会・パンフレットより）。

今年は2月23日～25日、妙正寺川の川面に色とりどりの反物がなびぎました。着物姿の老若男女が歩いていきます。古きよき時というものがあるのならば、それを感じるこんな街に猫とのんびり暮らせたらと思っています。（原田克子）

2018年4月の行事予定

- 4日(水) 13:00 俳句会
投句の場合は兼題「蝌蚪、民」及び当季雑詠
- 5日(木) 14:00 ○公開フォーラム
「大統領選挙後のロシア情勢と日露関係」
袴田茂樹氏(新潟県立大学大学院教授、青山学院大学名誉教授)
- 6日(金) 14:00 ○公開「近現代史講座」第14回
講師 大日方純夫氏(早稲田大学教授)
『日本近現代史を読む』「第18章 戦局の転換」
- 10日(火) 14:00 謡曲会(松木先生稽古日)
- 12日(木) 18:30 ◎公開アジア研究懇話会
「習近平新時代の北京特派員」
古谷浩一氏(朝日新聞中国総局長)〈1月末まで〉
(朝日新聞論説委員)〈4月1日就任〉
- 13日(金) 11:00 一石会囲碁例会
- 17日(火) 13:00 謡曲会例会
- 24日(火) 14:00 謡曲会(松木先生稽古日)
- 26日(木) 14:00 ○公開フォーラム
「企業のTOB問題」(仮題)
藤枝省人氏(慶應義塾大学名誉教授、当会員)
増野亨氏(社可視経営協会理事、当会員)
- 27日(金) 16:00 ○公開「善隣中国塾」第7回
塾長 矢吹晋氏(横浜市立大学名誉教授)
『習近平の夢』「第6章 結びに代えて」

4月の会議予定

2日(月) 14:00	環境委員会	11日(水) 14:00	財政委員会
5日(木) 15:30	講演委員会	19日(木) 14:00	理事会(第1回)
〃 15:30	広報委員会	20日(金) 11:00	顧問会(第1回)
6日(金) 14:00	東北委員会	27日(金) 13:00	諮問会(第1回)
10日(火) 14:00	国際交流委員会		

※会員外一般聴講者の参加費は、◎印：1000円、○印：500円、無印：無料です。

※下線は通常日程に変更あり

みんなの 写真館



ISSN 0386-0345
二〇一八年（平成三十年）四月一日・毎月一日発行

「善隣」第四九〇号（通巻七五七）

発行所

〒一〇五〇〇〇四 東京都港区新橋一五五
一般社団法人 国際善隣協会
電話 〇三三五七三三〇五（番代表）

INTERNATIONAL GOOD NEIGHBORHOOD ASSOCIATION (IGNA)

<http://www.kokusaizenrin.com>